

正智深谷高等学校特別コラム

Mind Charging

Since 2020

第346回

『淀川長治』

の名言

発行：入試広報室

発行日：令和5年3月2日

編集委員：入試広報室 鈴木



今回の言葉

私はいまだかつて 嫌いな人に逢ったことがない。

淀川 長治は、日本の雑誌編集者、映画解説者、映画評論家。約32年に渡って務めた『日曜洋画劇場』の解説の締め括りに「サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ…」と強調して言う独特の語り口から全国的に有名になり、「ヨドチョーさん」「ヨドさん」「サヨナラおじさん」等と呼ばれる程に多くの視聴者に親しまれてきた。

Column

淀川長治さんという人物をみなさんは認識がないと思いますが、おそらく保護者様の中には『懐かしい!』と思う人が多いと思います。現在のテレビ放送による映画解説は音声のみですが、その昔は淀川さんのように映画評論家として顔を出してその作品の解説をする時間がありました。毎回、解説の締めくりに淀川さんが言う『さよなら・さよなら・さよなら』のモノマネをする人もいたほどの人気映画評論家です。

今回の言葉を聞いて“そんなはずないでしょ”と思う人も多いと思います。正直言って私もそう思いました。または“初対面から嫌いな人がいないだけで途中から嫌になった人はいるでしょ”と思いました。そう思った時に私は“人の嫌なところを探す人と好きなのところを探す人に分かれる”ということに改めて気づきました。そういう意味で淀川さんは“極めてポジティブな人”だったのだと感じました。あえて“極めて”という言葉を使いましたが、私もどちらかと言うと人の良いところを探すタイプだからです。しかし、私はまだまだ修行が足りないで淀川さんのように出会った全ての人を肯定できるほどポジティブではありません。単純に考えれば良いところの数が悪いところの数を上回れば嫌にはならないはず。良いところの数が圧倒的に多くなるよう今後も人の良いところを探していこうと思います。

ここまで述べてきた中で、ひとつの気づきがありました。『良いところを多く見つけるために悪いところを見つみぬフリをしてしまわないか』ということです。心理的にはとても理解できることですが、それは自分の中の“負担”になってしまいます。淀川さんはそんな負担さえも超越した思考やとんでもなく痛みに強い性格の持ち主だったのでしょうか。映画評論家としても非常に高い評価を得た人物ですが、心理学の知識も豊富だったのでないかと思ってしまう。人間の様々な心理を描く映画という世界に精通した人物ですから作品の多くのシーンから読み取る人間の気持ちの全てを理解した独学で学んだ心理学者のような雰囲気さえ感じます。私たちが淀川さんのような優しい笑顔と考え方を学んで多くの人の心に寄り添っていきたいものですね!